

【資料】

## 星野鏡三郎の事跡（４）

—兒玉九十編輯・星野正一発行『父の思出』から—

【資料 1.】

### 兒玉九十「故星野先生の御人格」

月日の立つのは實に早いもので、星野先生が逝かれて、早や十月を経過し、一周忌の思出の日も間近になりました。

先生が他界せられて後、時と共に色々の事が憶ひ出され、綿々として盡きぬのであります。私は其の思出の中、星野先生の御人格を偲ぶ一端を述べて見ようと存じます。

第一にあげたい事は、先生が實に立派な頭脳を持つて居られた事であります。明哲、透明、敏感、といふ如き様々の語を以てしても表現し盡されぬ立派な頭脳で、一を以て十を知る人とは正しく此の様な頭の方をいふのであらうと、私は常々そう感じて居りました。それ故専門事業の見透しなどは實に敏速、明快で、夫々の専門技師の人々が各方面から數ヶ月調査して始めて結論を得られる様な大事業でも、先生は一目見、概略を聴いた丈で立所に結論を得られ、それが専門技師の調査の結論と附合する場合が多かつたといふ事であります。此は永年の體驗にもよませうが微に入り、細に互りて餘蘊なき働きをなし、而して又大局より達觀して引纏める所の頭脳にあらずんば到底出來得ない事で、一口に申せば實によい頭であられたと申す外はないのであります。先生にお目に掛つて、色々とお話を伺つて居りますと、秋晴の天を眺むる時の如き、すつきりした、何とも言へない、いゝ氣持になりますのは、明鏡を以て凡てを照らし、快刀を以て亂麻を斷つ様に、物事を四方八方から洞察し、分析總合して眞を掴まれる明透なる先生の頭脳の然らしむる所と信ずるのであります。

第二にあげたいのは意志が非常に鞏固であられた事であります。それは一生を通じて、實踐躬行、奮闘努力、不言實行、熟慮斷行を以て一貫された事が之を證して餘りある事であります。『私など奮闘時代には四時間以上睡眠を取つた事はなかつたが、此の頃の青年は實に意氣地がありませんね。』といふ様なお話は度々伺つたものであります。意志鞏固なるが故に責任感強く、義に厚く、自己の趣好に溺れる様な事は微塵もありませんでした。お酒を好まれましたから、若い頃は酒好きの來客でもあれば、おもてなしの爲に、夜おそくなる事も度々で、時には夜明かしする様な事があつても、翌日は何人よりも早く出勤し、自己の好みに依つて、仕事をおろそかにするが如き事は一度もなさなかつたと、他の方々から異口同音に伺つて居ります。此は意志鞏固、責任感強き結果と思ひます。

趣好に溺れぬ事を證する先生の直話で私の頭にはつきり銘記して居る事を一つあげましょう。或る時、世の中の事は何事でも人間が中心故、人間がしつかりしなくては事業も巧く行くものではないといふ話から私

が自分の體驗として次の如き話を致しました。

『私が成蹊學園在職時代に——世界大戦中の好況時代でしたが——同學園の實務學校の卒業生をほしいと申込んで來た銀行がありました。其の銀行の内容や行風を知らずして大切な教へ子を推薦する譯には参りませんから、私は一日其の銀行を見に行きました。朝十時頃に行つたのでありますが、其の銀行の主腦株の人人が碁を打つて居りました。此の一事で私は此の銀行は駄目と認定し、卒業生をやる事を斷りました。果せる哉、大正九年の第一回恐慌來の時、此の銀行は眞最初に倒れてしまひました』といふ意味の話でありました。此に對し星野先生は手を打つて喜ばれ『先生そこです。先生いゝ所に着眼されました。教育もそこ迄徹底しなくては駄目です。私も同じ様な經驗があります。地方出張所の巡回にて或る出張所へ行つた所、所員が朝から、將碁を差してゐるので、直ちに其の將碁板を床に投げ付けて所員を戒めた事でした。私も將碁は

極好きですが娯樂と仕事は別物です。仕事に取り掛つて娯樂にふける様な事で、碌な事が出来るものではありません。其の時に懇々出張所員を訓誨したのですが、只今お話の銀行も大正九年の恐慌に急に悪くなったのではなくて、重役が勤務時間中に碁を打つ様になつた頃から、土臺は搖ぎ始めて居たものですね』と感慨深く話されました。好んで而も溺るゝ事なき先生の意志鞏固を證する實例をもう一つあげましょう。

大正十一年明星實務學校建築最中の出來事ですが、星野先生が横濱の本邸に於て猛烈な胃潰瘍に罹られました。非常なる大患でありましたが、夫人の必死の看護と南博士の手當とで漸く快癒されたのであります。併し全快後南博士から飲酒を止められました。先生は博士の命を嚴守し、平素、戲談半分に命と取替へてもいゝと迄言つて親しまれた酒を博士から許の出る迄、丸二年間といふものは全然斷つて居られました。恐らく星野先生にして出来る事で尋常一様の意志力の人なら、とても斯様な事は出來なかつたと思ひます。南博士も驚かれたそうですが、私もよく守られたものと敬服措く能はずでありました。

頭腦明晰な人には理詰めで見、冷靜事を考へる力はありませんが、情に於て飲くるのが普通であります。處が星野先生は前述の如き明敏なる理性、鞏固なる意志力を備へながら、而も實に豊かな人情を備へて居られました。先生の回顧談の中にある通り、九才か十才の普通なら遊びたい一方の時代に、弟を背負ひながらお母様の内職たる風繩を縫る事を手傳つたのも親思ふ孝心の至情からであつた事は、私が先生の年少の頃の事から詳しく伺ひたいと申した時に『父が國事に東奔西走し、母の言語に絶する苦みを見ては、子供ながら座視するに忍びませんでしたから風繩よりを手傳つたのであります。併し當時の事を追懐すると、只々涙が湧き來り、言葉が出ません』と申され、後は涙あるのみでありました。此の厚い至情が親に對しては孝となり、君國に對しては忠となり、他人に對しては厚き同情となつて表はれたのであります。

大正元年九月十三日の夜、乃木將軍が、明治大帝に殉死されたのを知つた時など、熱涙を流され、暫しの間は慟哭がどうしても止まらなかつたといふ事を、私は後で未亡人から伺ひましたが、此は純忠至誠に對する深き感動の表れで、流るゝ涙の中に故人の武士精神、人格そのものが躍動して居ると思ひます。後年伏見桃山の乃木神社に繪馬奉納(繪馬と申しても馬専門の木彫家後藤省吾氏をして一年餘を費して櫓の一枚板に二疋の馬を彫刻せしめた大力作で、ありふれた繪馬の類でなく實に心の籠つた額であります)を致されしは故人は何も申しませんでした。乃木大將殉死の時の至誠感動を神前に奉られしものと推察致します。

その他、神社佛閣に參拜の際は五十錢、十錢銀貨を澤山袋に入れて御賽錢と同じ様に附近に立つて居る物乞ひの人々に與へられるなど、些々たる事の様ではありますが、如何に同情心に豊んで居るかを示すものであります。その他、一々此に記す事は省略致しますが、同情の上から人助けをせられし事は私の知つて居る丈でも大小數へ切れぬのでありますから七十餘年の一生を通じて他人に致されし同情の表現は蓋し莫大なものであつたらうと信じます。

實に故星野先生は知情意の兼ね備つた稀に見る人格者でありました。此の人格が實業に於て先生を成功者たらしめたのであります。併し先生は其の成功に少しも甘んずる事もなく、又毫も誇る氣持もなく、更に國家興隆の根源たる人材養成のため、吾が明星中學校を設立されました。而も先生は私に向つて『學校を建てさせて戴いてありがたう御座いました』と感謝されました。獨力、資を投じて世の爲に學校を建て而も感謝される御精神、實に氣高いといふべきか、崇高と申すべきか、表現の辭がないのであります。私は己を空しうして直ちに絶對境に没入する斯る清く、朗なる氣持こそ、神性であり、佛心であると信ずるのであります。私は此の時、先生の體から光が發する様な感に打たれ、頭を垂れ、涙を以て、心中で先生を拜んだのでした。先生が如何に學校に精神を傾注して居られたかは臨終に際して『學校の事を宜しく願ひます。此で思ひ残す事なし、樂に逝けます』といふ御言葉を最後として樂々と永へに眠られた事でもよくわかります。學校の事を斯くも喜び、最後迄念とせられし事は、先生の一生を貫きし、忠君愛國の至情の發露たりし事は茲に事新しく説明を要しない事でありました。

日本人として忠君愛國の念なきものはないのであります。先生は此の點に於ても尋常一様ではありませんでした。右の如く學校を始めとして諸種の公共事業の寄附數、枚舉に遑なき事が之を證して餘ある事でありましたが、最も明に、最も有力に之を示す事は日清日露兩役に際して自己の専門業務を通じ身を挺して國難

に盡された事であります。即ち日清戦争に際しては仁川京城間の鐵道敷設に身を以て當られ、皇軍の爲に盡されし事は圖り知るべからざるものでありました。特に日露戦争に際しては、大浦遞相の懇望にて京釜鐵道の黄間<sup>(マア)</sup>隧道、漢口鐵橋工事を擔當し、眞に命を懸けて責任を全うせられしは聞くだに悲愴なものであります。即ち此の工事中途に猛烈なる發疹チブスに罹られ醫師は内地歸還療養を迫りしも、斯くては従事員全體の志氣を沮喪せしめ皇軍に對し如何なる不利を招かずとも限らずとなし、元より國に捧げし生命、倒るゝ迄使命に服すと稱し、一步も退かず、現場にあつて療養しつつ、指揮を採り、二ヶ月も早く竣成せしめ、征露の皇軍に多大の便利を與へたるが如きは、生命を國に捧げ居る事を如實に示すものであつて、其の決意は砲煙彈雨の中に身を曝らす戦線の士と寸分異なる所なきものであります。

斯る赤誠報國の精神は教育に依りて培ひ之を永遠に傳ふるの外道なしとして設立せられたのが吾が明星中學校でありますから、吾が校に職を奉ずるもの、來り學ぶ者は共々に此の赤誠報國の精神を體する事に粉骨碎身しなくてはなりません。これ實に吾々國民たるもの、最大任務であると共に故星野先生の靈を慰め奉る最上最善の道だからであります。

私は公私につき書きたい事、書くべき事はまだまだ澤山御座いますが、紙面が許しませんからそれらは一切割愛し以上を以て擱筆する事に致します。

## 【資料2.】

### 年 譜

安政六年	一歳	十二月六日、江戸小石川白山、姫路藩主酒井雅樂頭邸内に生る。先祖、下野國星野城主星野長門守源正次没年より數へて五百一年目に當る。
慶應元年	七歳	藩候邸内學問所に入學す。
明治三年	十二歳	鹿島岩吉氏方に預けらる。
明治七年	十六歳	鹿島家庫番を命ぜらる。
明治九年	十八歳	鹿島家地方出張所會計係を命ぜらる。
明治十二年	二十一歳	鹿島岩吉氏卒し岩藏氏の代となり、鹿島組の組織なり其の組員に加はり、本店詰を命ぜらる。
明治十三年	二十二歳	地方出張所詰を命ぜらる。
明治二十一年	三十歳	七月附明治十九年二十年の兩年に互る擔任地方鐵道工事成績優秀の故を以て鹿島組より受賞。
明治二十二年	三十一歳	六月附明治二十一年職務精勵につき鹿島組より受賞。七月一日附鹿島組工事部長を命ぜらる。
明治二十三年	三十二歳	五月附二十二年中職務精勵につき鹿島組より受賞。
明治二十四年	三十三歳	五月附二十三年中擔任職務精勵の廉にて鹿島組より受賞。
明治二十五年	三十四歳	六月附、二十四年度擔任職務精勵の廉にて鹿島組より受賞。
明治二十六年	三十五歳	二月十七日和歌山縣士族後藤廣貞長女花子と結婚。 六月附二十五年度職務精勵賞及二十五年度碓氷鐵道工事中格別注意行届きし廉にて特別賞を鹿島組より受く。
明治二十七年	三十六歳	四月附山陽鐵道三原廣島間完成成績優秀の廉にて山陽鐵道會社より受賞。 六月附二十六年度中擔任職務精勵の廉にて鹿島組より受賞。
明治二十八年	三十七歳	日清戦争勃發と共に特命にて仁川京城間軍用鐵道敷設の任に服す。 五月附二十七年度中擔任職務精勵賞を鹿島組より受く。
明治二十九年	三十八歳	五月附二十八年度中職務精勵の廉にて鹿島組より受賞。 十月一日篠ノ井線鐵道工事起工式。

明治三十年	三十九歳	八月附二十九年度擔當職務精勵の廉にて鹿島組より受賞。 十二月鹿島組辭職の議聞き届けらる。 星野商店を創立す。
明治三十三年	四十二歳	八月五日、八代鹿兒島間鐵道線鹿兒島第六工區起工式。
明治三十五年	四十四歳	二月五日鹿兒島線第六工區竣工。
明治三十六年	四十五歳	二月一日宮川電氣株式會社宇治山田一二見線起工、五月三十一日竣工。
明治三十七年	四十六歳	日露戰爭勃發と共に其の筋より朝鮮京釜鐵道、黄澗隧道、同扶桑隧道、第二漢口鐵橋工事の懇囑を受け挺身就任。中途發疹チブスに罹り内地歸還療養の醫命切なりしも、従業員の志氣沮喪と従つて生ずる皇軍輸送の不利を憂ひ、斷乎として現地を離れず、療養しつつ、指揮を採り、爲めに従業員全員の志氣大に振ひ、豫定より二個月早く完工し皇軍の活動を敏捷有利ならしむ。此の功に依り賞を受く。
明治三十九年	四十八歳	一月山梨縣南都留水路工事起工。
明治四十年	四十九歳	六月鐵道工業合資會社を設立す。
明治四十一年	五十歳	十月九日明治四十年一月横濱市神奈川町小學校建築費寄附の廉に依り銀杯下賜さる。 桂川水電工事成績優秀の廉にて東京電燈會社より感謝狀竝に賞を贈らる。
明治四十四年	五十三歳	九月恩賜財團濟生會設立の相談を受け率先賛成寄附の手續及納入完了。
大正元年	五十四歳	明治四十二年七月福島縣耶麻郡道路修繕費寄附の廉にて七月三十一日銀杯下賜せらる。 明治四十二年横濱市立小學校新築費寄附の廉にて九月七日附銀杯下賜せらる。
大正三年	五十六歳	二月十六日東京府貴族院多額納稅議員互選會に列す。
大正八年	六十一歳	七月星野合資會社設立。 十月公益の爲め私財寄附の廉に依り紺綬褒章を下賜せらる。
大正十年	六十三歳	十月鐵道五十年記念祝典に際し、本邦鐵道事業發達に裨益尠からざる廉にて表彰せらる。
大正十二年	六十五歳	星野合資會社社長を退き相談役となる。四月東京府下、府中町に明星實務學校(甲種商業)を設立す。
大正十五年	六十八歳	横濱市星野町の埋立事業完成す。 十二月十四日伏見桃山乃木神社へ神馬二頭彫りの額を奉納す。
昭和二年	六十九歳	明星實務學校敷地建物等の設備一切及び之に基本金を附し財團法人明星中學校を設立し、同時に明星實務學校を明星中學校と改稱す。
昭和三年	七十歳	十月御大典地方餐饌に御召を賜ふ。
昭和七年	七十四歳	十一月十一日發病(肝臟硬變症)十二月六日午前十時五十二分、伊豆伊東別邸に於て、家族、兄弟、知己に夫々永訣をなし、『思ひ残す事なし』を最後の言葉として安らかに永眠。 「法名」明德院鏡譽清月正道居士。 十二月九日遺志に基き近親及び會社學校關係者のみ集り初臺本邸に於て増上寺道重大僧正臺下導師にて嚴肅なる葬儀を行ひ茶毘 <small>(ママ)</small> に附し、十二日多摩墓地に埋葬す。



【解題】

## 星野鏡三郎の事跡（４）

一兒玉九十編輯・星野正一発行『父の思出』から一

解 題

高 島 秀 樹\*



昭和3（1928）年 御大典饗饌拝受記念写真 右：星野鏡三郎・左：兒玉九十（推測）  
（出典：『父の思出』 頁表記なし）

---

\* 明星大学名誉教授、元：人文学部人間社会学科教授・明星教育センター長、教育社会学



昭和3（1928）年 明星中学校に於ける古稀祝賀会記念写真  
3列目着席者左から10人目：星野鏡三郎・同9人目：児玉九十（推測）  
（出典：『父の思出』 頁表記なし）



星野鏡三郎の筆蹟

上：赤誠 昭和三年 元旦 星野鏡三郎（赤誠＝せきせい 意：まごころ、誠意、偽りのない誠の心）

下：克己 昭和三年 元旦 星野鏡三郎（克己＝こっき 意：私欲・邪念に打ち克つ）

（出典：『父の思出』 頁表記なし）

## 目次

はじめに

1. 『父の思出』
2. 『父の思出』に見る星野鏡三郎の功績・人柄
3. 兒玉九十「故星野先生の御人格」
4. 「年譜」

おわりに

## はじめに

明星大学を設置・運営する学校法人明星学苑は1923(大正12)年に創設された明星実務学校、さらにそれを母体として1927(昭和2)年に改組・創設された財団法人明星中学校・明星中学校(旧制)に淵源を持つ。明星実務学校・明星中学校の創設にあたって最も基礎となる教育理念をはじめ教育のあり方を定め、その実現のために校長として教育実践に取り組んだのは兒玉九十(1888(明治21)年～1989(平成1)年)である。明星実務学校・明星中学校の創設にあたって資金を提供したのは明治・大正期に土木工事、鉄道敷設工事、特にトンネル掘削工事に大きな業績を上げ、晩年の社会貢献として教育事業・人材の育成を志した星野鏡三郎(1859(安政6)年～1932(昭和7)年)である。この教育者と篤志家の二人の稀有な連携こそが、今日に続く明星学苑の基礎を築いたと言って良い。

兒玉九十については詳細な『兒玉九十自伝』をはじめ多くの著書や教え子による回想記<sup>1</sup>が残されており、その事跡については明らかとなっているが、星野鏡三郎についてはその事跡が十分に明らかになっていない。そこで解題筆者は明星教育センターの研究活動の一環として星野鏡三郎に関する資料を探求し、入手することのできた3資料を次のように本誌『明星－明星大学明星教育センター研究紀要』に解題を付して掲載してきた。

「星野鏡三郎の事跡(1)―星野鏡三郎の「履歴書」―」第2号 2012年

「星野鏡三郎の事跡(2)―沢和哉「土木の神様―星野鏡三郎」―」第3号 2013年

「星野鏡三郎の事跡(3)―星野鏡三郎の実兄、星野錫の伝記『星野錫翁傳』から―」第4号 2014年

今回は、星野鏡三郎の逝去1年後に刊行された追悼文集、兒玉九十編輯・星野正一発行『父の思出』が国立国会図書館に所蔵されていることが判明し、その複写を入手することができたので、(4)として掲載することとした。

## 1. 『父の思出』

本書はA5版、序3頁・目次2頁・写真筆蹟21頁・本文78頁・年譜4頁からなり、奥付には次のように記されている。

昭和八年十一月十三日印刷

昭和八年十一月十七日發行

編輯者 兒玉 九十 (住所略)

発行者 星野 正一 (住所略)

印刷者 星野 錫 (住所略)

印刷所 東京印刷株式會社 (住所略)<sup>2</sup>

これを見れば、明星中学校校長である児玉九十、子である星野正一、兄であり印刷業界で活躍した星野錫と、星野鏡三郎に縁の深い者が尽力し本書を刊行したことが理解される。

本書の刊行の趣旨については、星野正一が記した「序」によれば、星野鏡三郎の逝去後「…(略)…明星中學校で発行の月刊『體驗教育』誌の十二月號を特に父の追悼號とせられ、それを御覧になつた方々の中、態々、追憶文をお贈り下さつた方もあり、又御來訪の際、父の生前中につき私共の知らない色々なお話を聞かせて下さつた方もありました。」それらの追憶文を保存して伝えたい、家族が知らない生前中のことを残したいと考えて、本書を取りまとめたと説明されている。さらに、背景として星野鏡三郎が事業に活躍していた時期には家族と話す機会も少なく、「…(略)…活動時代の事に就いては、寧ろ生前御懇意を戴いた方面の方々から聞かせて戴く事が多い有様で御座いました。」という状況があったこと、また明星中學校において児玉九十が星野鏡三郎の「奮闘實話」を記録して教育資料とする計画をたて、第1回は実施したものの、第2回以降は「…(略)…父自ら成功談でもあるかの如くなつて面白くないと言つて…(略)…」遠慮したことから未完になったことも記されている<sup>3</sup>。このような意図・事情から星野鏡三郎の「回顧談」も含めて本書が刊行されたと理解される。

本書の内容は、次に記す目次(「序」は目次に記されていない)のとおりである。

目次		
回顧談	星野鏡三郎	一
星野さんの思ひ出	鹿島 精一	一三
星野鏡三郎大人の生涯を思ふ	曾和龜之輔	一七
星野先生を憶ふ	鈴木 巖	二〇
明星中學校の追悼會に臨みて	徳久 次郎	二三
故星野先生の御人格	児玉 九十	二七
尊い追憶	岩河 信義	三四
懐しき叔父上をしのびて	星野 辰雄	四〇
鏡三郎伯父を想ふ	村上 藤太	四八
富嶽の夫れの如くに	新美健之助	五三
明德院を想ふ	後藤 仁	五六
家庭の伯父様	後藤ふみ子	五九
星野鏡三郎先生を憶ふ	竹内 邦雄	六一
星野先生の追憶	早水 信夫	六四
故星野先生の追慕	長島 文道	六七
星野先生を憶ふ	今村 正夫	六九
温顔の星野先生	安齋 直泰	七一
忘れられぬ星野先生	櫻田 早苗	七二
僕等の星野先生	矢野 清一	七三
和子とおぢい様	星野 正子	七五
年譜		七九
寫眞 … (写真題目・略) …		<sup>4</sup>

本書では明星実務学校・明星中学校の卒業生・在学生以外はその所属や星野鏡三郎との続柄・関係は記されていないが、解題筆者がこれまでに知りえた情報や本書に掲載された文章の題目・内容から推測した各筆者の所属や続柄・関係は次のように把握される。



- 鹿島 精一 … 株式会社鹿島組 社長  
 曾和龜之輔 … 株式会社鹿島組 社員〔文章内容（…同組庶務掛主任…）から推測〕  
 鈴木 巖 … 株式会社鹿島組 社員〔文章内容（…鹿島組に転職…）から推測〕  
 徳久 次郎 … 娘婿 星野工事事務所 社長  
 兒玉 九十 … 明星中学校 校長  
 岩河 信義 … 明星中学校 教員  
 星野 辰雄 … 甥〔文章題目（懐しき叔父上…）から推測〕  
 村上 藤太 … 甥〔文章題目（鏡三郎伯父を…）から推測〕  
 新美健之助 … 姪の婿〔文章内容（…姪である妻は…）から推測〕  
 後藤 仁 … 〔文章中に（…幼年より故人の<sup>（ママ）</sup>聲咳に接する機会を得た…）とあるが、関係は推測できず〕  
 後藤ふみ子 … 姪〔文章題目（家庭の伯父様）から推測〕  
 竹内 邦雄 … 明星実務学校第一回卒業生  
 早水 信夫 … 明星中学校第一回卒業生  
 長島 文道 … 明星中学校第五学年  
 今村 正夫 … 明星中学校第四学年  
 安齋 直泰 … 明星中学校第三学年  
 櫻田 早苗 … 明星中学校第二学年  
 矢野 清一 … 明星中学校第一学年  
 星野 正子 … 嫁〔文章内容（…和子の母として…）から推測〕

このように、本書には業務関係者（株式会社鹿島組・星野工事事務所関係者）、明星中学校関係者、親族が執筆している。

## 2. 『父の思出』に見る星野鏡三郎の功績・人柄

上記のように本書の執筆者は業務関係者（株式会社鹿島組・星野工事事務所関係者）、明星中学校関係者、親族に大別されるが、各々の関係者は業務上の姿、教育者としての姿、祖父や親族としての姿を中心に記している。

業務上の姿については、鹿島精一が記している「明治十三年鹿島組が組織され、鐵道工事の請負を創めてからは常に第一線に出陣して奮闘努力せられ、鹿島組の基礎を築き上げた大功勞者である。」という位置づけや、「强健な體力と機敏果斷な性格」、「部下に非常に嚴格であつたが一方に又非常に溫情に富んで居られた」、「一見豪放の人でありながら一面に又極めて几帳面な用意周到な人であつた」<sup>5</sup>という人柄が、業務関係者の文章に共通して見られるとあって良い。このような位置づけや人柄が、各執筆者が星野鏡三郎とともに従事した工事（例えば、北越線、京都鐵道）における具体的な体験や、見聞した発注主との交渉のあり方などの例をまじえて記されている。

教育者としての姿については、岩河信義は「生徒一同が慈父の如く御慕ひ申した」こと、それが「常に謙讓で、希望抱負に富み、淡泊で元氣で、忍耐力の強いお方」という人柄によると記している<sup>6</sup>。卒業生が「星野先生は、設立者であらせられて、直接私達の教育に當られた方ではありません。しかしその高潔なる精神、柔和なる態度は、諸先生方の影にあつて、私達を明星精神の建立へと導いて下さつた事は、事實です。接觸機会は、大へん短かつたですが、それでも、非常な感化を、私達に與へられた先生の偉大さには、全く敬

服の他ありません。』<sup>7</sup>と記していることに代表されるように、折にふれて生徒に接することによって感化を及ぼしていた姿が記されている。

祖父や親族としての姿については、星野正子は孫には「かづ子はいゝ子だ、いゝ子だ」と語りかけ、「和子に菓子をやるのは、御祖父さんだけだよ 誰れもこの戸棚から菓子を出していけないよ。」<sup>8</sup>というやさしく、孫をかわいく思う祖父としての姿を記している。また星野錫の子、星野辰雄は受験に不合格となった時に「過ぎ去つた失敗に落膽して居るべきではない、直ちに自分自身で学校を選択し、入學手續等、萬事自力で決行せよと激励して下さつた」<sup>9</sup>ことを記しているが、これに代表されるように、親族、特に若者を応援し、その背中を押す役割を果たしていた姿が記されている。

### 3. 児玉九十「故星野先生の御人格」

児玉九十「故星野先生の御人格」については全文を掲載したので、解説を付す必要はないかと思われるが、解題筆者としては次の2点に注目していることを付記したい。

その第1は星野鏡三郎の人柄についての児玉九十の認識・評価であって、星野鏡三郎の人柄について、第1に「實に立派な頭脳を持つて居られた」、それは「明哲、透明、敏感、といふ如き様々の語を以てしても表現し盡されぬ立派な頭脳で、一を以て十を知る人とは正しく此の様な頭の方をいふのであらう」と記している。第2に「意志が非常に鞏固であられた」、「それは一生を通じて、實踐躬行、奮闘努力、不言實行、熟慮斷行を以て一貫された事が之を證して餘りある」と記している。第3に「明敏なる理性、鞏固なる意志力を備へながら、而も實に豊かな人情を備へて居られ」、それが「親に對しては孝となり、君國に對しては忠となり、他人に對しては厚き同情となつて表はれた」と記している。その上で、それらをまとめて「知情意の兼ね備わつた稀に見る人格者でありました。」と記している<sup>10</sup>。なお、忠君愛國の念が強く、それが「日清日露兩役に際して自己の専門業務を通じ身を挺して國難に盡された」<sup>11</sup>ことに最も強く示されていると記しているが、このような忠君愛國の念は明治日本人の多くが共通して持つ傾向であり、それに加えて星野鏡三郎が武士階級出身であることによるのではないかと解題筆者は考えている。

その第2は星野鏡三郎の学校創設への思いを児玉九十がどのように受け止めていたかであって、最も基本的には「國家興隆の根源たる人材養成のため、吾が明星中學校を設立されました。」とその意図を受けとめていることを記している。「而も先生は私に向つて『學校を建てさせて戴いてありがたう御座いました』と感謝されました。」と記され、さらに「先生が如何に學校に精神を傾注して居られたかは臨終に際して『學校の事を宜しく願ひます。此で思ひ残す事なし、樂に逝けます』といふ御言葉を最後として樂々と永へに眠られた事でもよくわかります。」<sup>12</sup>と星野鏡三郎にとっての学校の意味を児玉九十がどのように感じていたかを記している。

児玉九十は身近に接した者ならでの具体的な出来事も多く記しているが、「故星野先生の御人格」の焦点はこの2点であると解題筆者は考えている。

### 4. 「年譜」

本書巻末には星野鏡三郎の「年譜」が掲載されている。これまでに掲載した3資料と比較して、この年譜の特徴・意義は次の点にあると解題筆者は考えている。

1. 星野鏡三郎の履歴についての資料としては、先に「星野鏡三郎の事跡(1)」において紹介した「履歴書」があるが、これは1926(大正15)年に作成されたものであり、それ以後の事跡が明らかになることが

本書年譜の基本的な意義である。

2. 「星野鏡三郎の事跡(3)」において紹介した『星野錫翁傳』には星野鏡三郎の逝去時までの事跡について文章として記載されているが、本書年譜ではそれが履歴書形式で明記されており、さらに逝去時の状況についても詳しく記載されている。
3. 「履歴書」では「一、学業」としてまとめて文章として記されており、「土木の神様」『星野錫翁傳』においても文章として記載されていた誕生から1879(明治12)年に鹿島組が組織され、その組員となるまでの学業や鹿島家との関係などの事跡が本書年譜では履歴書形式で明記されている。
4. 「履歴書」では「一、業務」として複数の工事实績が6項目にまとめて記されていた(例:…諸種の官設または私設の鉄道工事を担当し…)が、本書年譜では年を明記して個別に記されており、活動の実態を明確にとらえることができる。
5. 「公益事業」(社会的貢献)、「賞罰」については、本書年譜では紺綬褒章のほかは鹿島組からの受賞と直接専門業務に関係する受賞のみが記載されており、「履歴書」の方に詳細に記載されている。なお、「土木の神様」、『星野錫翁傳』にも「公益事業」、「賞罰」は詳細に記載されていない。

本書年譜を参照しても疑問点は残されたが、その第1は、誕生日であり、1859(安政6)年12月6日(=「履歴書」、「土木の神様」、本書年譜)か12月11日(=『星野錫翁傳』)のいずれかについては本書年譜に記載されていることから6日が正しい可能性が高いと考えることもできるが、解題筆者としては断定することは躊躇せざるを得ない。その第2は、鹿島組から独立し星野商店を興した年であり、1896(明治29)年(=「履歴書」、「土木の神様」)か1897(明治30)年(=本書年譜、『星野錫翁傳』)かである。本書所収の曾和龜之輔「星野鏡三郎大人の生涯を思ふ」には「…明治二十九年星野商店を設立するや…」と記されているが、鹿島建設株式会社の社史史料では「明治30年に独立し、星野組を設立。」<sup>13</sup>と記されており、これらを参照しても独立の年について断定することは困難である。

このような疑問点は残るものの、星野鏡三郎の事跡については前3資料によって明らかにされた内容に加えて、本書年譜によってより明確になったとあって良い<sup>14</sup>。

## おわりに

現代のマスコミ報道等においても故人を回想・追悼する場合は、その功績や長所は取り上げられるものの、いたらざる点については触れられない傾向がある。本書に関しても、そのような限界があることを十分考慮して読解しなければならない。そのような注意点はあっても、本人の談話筆記を含むとともに、身近に接した者でなければ記すことのできない星野鏡三郎の人柄や言動を具体的に知ることができる点が本書の資料としての貴重な価値であると解題筆者は評価していることをおわりに記しておきたい。

(2018年12月・稿)

## 注

- 1 児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』1990年  
児玉九十『明星ものがたり』1976年、等  
“児玉九十先生を仰ぐ” 明星同窓会編集委員会編『児玉九十先生を仰ぐ』1990年
- 2 児玉九十編輯『父の思出』1933年、巻末・頁記載なし
- 3 同上、巻頭1・頁表記なし  
明星中学校『月刊 体験教育』第四十六号(号数表記に不整合あり)・昭和7年12月号、1932年
- 4 前掲、注2と同じ、巻頭2・頁表記なし

- 5 鹿島精一「星野さんの思ひ出」(同上所収)13～14頁
  - 6 岩河信義「尊い追憶」(同上所収)35頁
  - 7 早水信夫「星野先生の追憶」(同上所収)64頁
  - 8 星野正子「和子とおぢい様」(同上所収)75頁
  - 9 星野辰雄「懐しき叔父上をしのびて」(同上所収)43頁
  - 10 兒玉九十「故星野先生の御人格」(同上所収)27～30頁
  - 11 同上、32頁
  - 12 同上、31～32頁
  - 13 鹿島建設株式会社「鹿島の軌跡 こぼれ話第50回 星野鏡三郎の独立」
  - 14 年譜(前掲、注2所収)79～82頁
- なお、「履歴書」「土木の神様」『星野錫翁傳』については本稿「はじめに」参照

#### 参考文献

兒玉九十編輯『父の思出』星野正一発行、1933年

鹿島建設株式会社総務部本社資料センター『あなたの隣の明治の鹿島』鹿島建設株式会社、2018年

鹿島建設株式会社「鹿島の軌跡 こぼれ話第50回 星野鏡三郎の独立」(<https://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki/kiseki50/index-j.html>)

煩雑になることを避けるため、本稿作成に参照した参考文献であっても前3稿に使用し記載した文献は記載を省略した。ご了解いただきたい。

#### 付記

1. 本稿は歴史的研究であると考え、全て敬称を省略させていただいた。ご了解いただきたい。
2. 資料の探索・入手に関して、鹿島建設株式会社総務部本社資料センター小田晶子氏、明星大学図書館・広報室(当時)矢部暁一氏、明星大学明星教育センター御厨まり子課長・長谷川倫子学芸員の協力を得た。  
筆跡の解説に関して、府中市郷土の森博物館深澤靖幸学芸員・花木知子学芸員のご教示を得た。  
記して、感謝の意を表します。
3. 星野鏡三郎「回顧談」、『月刊 体験教育』(星野鏡三郎追悼号)については、いずれ機会があり、可能になった時点で本紀要に掲載・紹介したいと考えていることを付記しておきたい。